

## 岡本村の第六天

浜田 道雄

東名高速道の用賀インター入り口から高速道路に沿って真っ直ぐに野川に向かう一般路には奇妙なところがある。環八から三〇〇メートルほど西に進むと突然半円を描いて回り、そこを過ぎるとまた直線になるのだ。なにかを避けて回っているように見える。その半円のなかには何本かの樹の茂みと古い切り株があるだけだが、薄暗くなんとなく不気味な感じがしないでもない。

土地の人の話によると、ここには以前「第六天」を祀る祠があったという。江戸時代この辺りは岡本村と呼ばれていたが、村の辺り一体は將軍の「お留め狩場」であって「糺の森」として人々の立ち入りが禁じられていた。第六天はこの禁断の地の土地神だったのだそう。



第六天の祠は高速道を作るとき近くの岡本天満宮の境内に移されていまは天満宮の摂社として祀られているが、この高速道脇の道を作るとき祠の跡ではいろいろと不思議なことが起きて工事がひどく妨げられた。それを土地の人々は「第六天の祟り」だとして、回り道造ったのだという。そんな話を聞いてみると、この空き地に漂うおどろおどろしい気配にも納得できる。

第六天は「第六天魔王波旬」のことである。仏陀の教えに逆らう様々な欲望礼賛を説いて人々の修行を妨げる天魔であって、仏教徒最大の敵だ。この第六天には面白い話がある。

戦国時代の末武田信玄が自分と天下を争う織田信長に宛てて「天台座主沙門信玄」と署名した書状を送ったところ、信長はその返書で自らを「第六天魔王信長」と名乗ったという。仏教勢力を味方に天下を狙った信玄に対して、比叡山焼き討ち、長島や石山の一向一揆征伐と仏教とは徹底的に戦った信長の面目躍如たるエピソードだ。

第六天信仰には地域的に大きな偏りがある。第六天を祀る神社や祠で今日も残るものはすべて武蔵、相模、伊豆など東日本にあって、西日本にはまったくないのだ。関東では仏教の大敵である魔王が広く祀られたのに、西国の人々はなぜ祀らなかったのか。

日本の東西で民俗や文化に多くの違いがあることはよく知られている。第六天信仰もその一つかもしれない。なぜなのか？ これは調べてみる価値のある面白い課題ではなかろうか。